

取り組み事例 2

新たな社会基盤構築において、ICTが重要な役割を果たす

日本ユニシスは、現在日本が直面している「少子高齢化」「地方の過疎化」「医療費の増大」などの社会的課題の解決に、ICT技術を使って取り組んでいます。

例えば、ヘルスケアの領域では、診療情報や薬の処方情報、健康診断の情報などを一元管理し、相互公開することで円滑な医療サービスを実現する「生涯カルテ」の実用化に向けて動き出しています。現在はまだ試行段階ですが、実用化に向け部門横断的に取り組んでおり、次世代に向けて、社会的課題の有効な解決策になるサービスの開発をめざしています。

新たな地域連携のシステムづくり

2013年4月、新潟県の佐渡島における医療の効率化と品質保持のために、日本ユニシスがシステム構築した「さどひまわりネット」が稼働しました。

佐渡島は、人口6万人のうち4割弱が65歳以上と高齢化率が高く、医師の数が全国平均の6割未満と大きく不足しているなかで、島の医療レベルを維持していくための抜本的な改革の必要に迫られていました。その改革のためにICTを活用した佐渡地域医療連携ネットワーク「さどひまわりネット」を導入することで、島の医療レベルを維持できるようにしたのです。

このシステムは佐渡市内の病院、診療所、調剤薬局から介護施設まで73カ所の施設（2013年4月現在）の患者さんの医療情報を共有し、一元管理する全国初のシステムとなります。既存のデータを活用するシステムであり、「レセプト（外部機関

システムが「あたりまえ」の存在になるために

この「さどひまわりネット」は、特定非営利活動法人「佐渡地域医療連携推進協議会」が運営を行っています。佐渡島に住む住民のお互いを支え合う意識が高いということも、システムの稼働を支えています。このような地域特性もあり、「さどひまわりネット」への情報共有に同意した患者さんの数は4月以降順調に増加し、2013年7月現在、佐渡島の人口6万2000人の1割を超える9000人に上っており、参加する医療機関や調剤

こうした医療情報の共有化には、患者さんに関する情報を共有することで治療に役立てるという面に加え、病気を予防するために有効な生活習慣を把握するという効果もあります。ICTを活用することで、病気の予防策を見出すことができれば、「医療費の増大」といった社会的課題の解決にも貢献できるのではないかと期待しています。

このように当社は、新たな社会基盤づくりを考え、持続可能な社会に役立っていくことをめざしています。

向けに提出するための医療情報)」を共有するための新規のインフラを導入する必要はなく、電子カルテシステムのない診療所も参加しやすくなっています。

まただれでも画面を見れば操作でき、医師や看護師はマニュアルを見ながら操作を覚える必要がなく、日々の仕事が増えることもありません。突然病院に運び込まれてくる患者さんであっても、このシステムを利用すると通院歴や過去の既往歴、検査結果などの情報を確認することができるので、医師も的確な診断を下すことができます。医療機関と患者さんとのトラブルを未然に防ぐ効果も期待でき、「医師や看護師のハードワーク」という社会的課題にも対応するシステムであることから、医療関係者にとってもメリットが大きく、そのことが、現場での医療の品質を一層向上させるという好循環につながっています。

薬局も増えてきています。

今後、このシステムを佐渡島の地域医療インフラとして「あたりまえ」の存在として活用できるものにするために、機能を拡張していく予定です。具体的には、第二フェーズとして、医療と介護の連携に向けて介護施設でのデータや在宅診療のデータを医療機関と共有できるようにすることをめざしています。

お客さま、利用者さまの声



佐渡島の医療レベルを維持し、未来を支えていくために

特定非営利活動法人佐渡地域医療連携推進協議会 理事
新潟県厚生連佐渡総合病院 外科部長

佐藤 賢治 様

「さどひまわりネット」が稼働して3カ月が過ぎ、このシステムの意義を佐渡島の多くの住民の方に認めてもらっている実感があります。システム利用には住民の個別同意が必要ですが、2013年7月現在で佐渡島住民の約15%から同意を得ることができています。この結果、急速に佐渡島内の医療情報が蓄積されつつあり、検査・処方の重複回避や、薬の処方の情報共有などの効果が出始めました。佐渡総合病院に来院される患者さんには、「近くの医療機関を受診しても佐渡総合病院の検査や薬がわかりますし、逆に佐渡総合病院でも近くの医療機関を受診した際の情報がわかります」と説明し、喜んでいただく様子を見ると、とても嬉しく思います。

この「さどひまわりネット」は、病院・医科診療所・歯科診

VOICE

療所・調剤薬局・介護施設など医療に関与する全機関が情報の提供と参照を行う双方向性ネットワークである点が大きな特徴です。この前例のない取り組みのために、日本ユニシスが、私たちのコンセプトを理解し、要望を取り込み、実現に向けての技術力を駆使し、課題に対応してくれたおかげで当初の方針に沿ったシステムが実現され、プロジェクトが稼働できています。

地域医療連携システムは、電子カルテありきで考えるのではなく、「全体最適化」を見すえた構築が重要です。他領域での実績が豊富な日本ユニシスだからこそできるシステムづくりを、今後、医療界にも広げていただくことを期待しています。

システム開発者の声



前例のない開発をやり遂げた手応えを 今後活かすことが目標

日本ユニシス
公共システム本部ヘルスケアサービス部第一室
室長

原田 一馬

「さどひまわりネット」のような大規模な地域医療連携システムは、日本ユニシスだけでなく業界でも例を見ないのであり、私自身、一からつくり上げるこの規模のプロジェクトマネジメントは初めてで、多少の不安を感じながらのスタートとなりました。佐渡島の地域医療は、現状維持さえ大変な状況にあり、限られた予算の中で、ICTを使って現状を維持する環境を提供するプロジェクトになりました。

VOICE

開発期間中は、佐渡島で3カ月以上も寝食をともにしながらシステムをつくり上げる、という貴重な経験でした。

そしてシステムの稼働後に、佐藤先生をはじめ、さまざまな利用者から「ありがとう」と言われたことや、実際に施設へ訪問した際に、他施設のデータを参照できて喜んでおられる住民の方の顔を拝見できたことは、今後の仕事に向けて大きな手応えとなりました。